

一般市民による森林整備活動

森倶楽部 21 代表 ○永田千恵子
丸山 芳秀

要旨

森林の荒廃が叫ばれている現在にあって、環境保全を意識している人々、町に住み山持ちでない市民が森林整備活動に参画できる方策はあるのでしょうか？実際にそのような市民が行ってきた6年間の活動の中身を検証し、国民参加の森づくりに向けての可能性を探ってみます。

はじめに

森林を経済林として位置づけるだけでなく、森林の持つ公益的機能がより重視されるようになりました。しかしながら身近な里山を始めとする人工林は手入れがなされずに放置されている所が多い現状です。ところがこのようなことを知っている人々はまだ多くはありません。地球の温暖化という言葉は知っていてもそれが自分たちの生活とどう結びつくのか、どう行動していけば良いのかと考えることにはまだまだ無関心です。私たちはこれではいけないと考えます。市民として森林整備活動に加わることを通して、森林の生態系を学び、林業をとりまく暮らしのあり方を見直し、ローカルな活動から地球環境まで見据えるグローバルな視点を持って、環境保全を進めていきたいと考えるようになりました。

1 森倶楽部 21 の紹介

2004年1月現在の会員数は38名です。その内訳は男性が22名、女性が16名です。年齢は20代から60代までで、平均年齢は約43歳です。男性のほとんどはサラリーマンですが、林業従事者が3名、林業行政職が5名という内訳になっています。女性は主婦が大半です。居住地は、松本市近辺の市町村がほとんどですが、中野市、上田市の会員もいます。活動は月2回の日曜日にフィールドワーク、月1回ミーティングを行っています。6年間の活動は、おもに大町市と明科町の山林で行われ、そのための準備会議は松本市内の公民館を拠点におこなって来ました。

2 活動の経過

1997年地球温暖化防止に向けての国際会議が京都で開催されました。この会議をきっかけに『石油に依存している暮らし方を見直そう』という仲間が集まり、学習会を行ってきました。その仲間が中心となり、1998年5月に映画「草刈十字軍」を上映しました。県下4会場で開催し、多くの方に『植林した木は、育つためには手入れが大事』ということを理解していただきました。この映画の終了後、身近な山の現況を知ろうと定期的な集まりを持つことになり、森倶楽部 21 の活動が始まりました。しかし、山との関係のなかった市民にとって、実際に山仕事に関わるようになるためには、いくつかの条件が必要です。活動の手始めにまず大

町市の荒山林業を見学に行きました。北山の森の見学時には、同林業スタッフによるカラマツの間伐施業を見学し、ノコギリで木を伐り倒すということを初めて体験しました。このあとカラマツ林約1haの林分の間伐を任されることになりました。翌1999年春から間伐施業体験が始まりましたが、何分にも知らないことばかりですので、すべて荒山林業スタッフ（現在企業組合山仕事創造舎）に手取り足取りの技術指導、山の見立て方などを教わりつつ、恐る恐るの間伐施業が始まったのです。（写真—1、2参照）また、ここでは荒山氏の林分を卒論のテーマにする信州大学農学部の学生達との出会いもありました。この交流を通じて、学生たちの学習機会に同行、東京大学北海道演習林を訪ねることができ、様々な林分と施業、経営などを学ぶ機会を得ることができました。このような交流は、社会人対象の学外卒論発表会へと発展し、共に森林を学ぶ機会となっております。（今年は5回目になります）



写真—1 チェーンソーの目立てを教わる



写真—2 へっぴり腰のチェーンソーワーク

一方、技術的な指導は、県の林業総合センターでの伐木造材講習や各地方事務所が主催する森づくり講習会に積極的に参加する中で得ることができました。が、このような手段があるということを知ったのは、2000年に入ってからになります。『北山の森以外の活動地が欲しいがどこから情報が得られるだろうか』と探っていた時に、タイミング良く松本市の公民館講座で森を訪ねる企画がありました。この時に地方事務所の林務課 AG から松本地方の森林の現況等の話があり、活動地を希望する旨のお願いをしました。その結果縁があったのが明科町長峰山の民有林です。このような過程を得て県の林務担当からも適宜森林情報をいただけることになりました。長野県での森林ボランティア活動団体は1997年ころから現れ始めたようですが、まだ行政に認知されていなかったのではないかと思います。2001年から緑の基金による「森林ボランティアリーダー研修」（写真—3参照）などが毎年実施されるようになり、国土緑化推進機構の開催する全国研修とあいまって、このような機会を通じて知り合った方々とのネットワークが広がっていきましました。会単独ではできにくい研修をネットワークで企画し、行政職にも御参加ご指導いただき、長野県の森林づくりを多くの方々と考え、実践していく輪が広がりつつあります。会員にはこのような広がりフィールドでの実践を共有できるよう、毎月の会報発行と一年の活動から感じたことをまとめていく年会報を発行して、相互理解が深まるようにしています。（写真

一4参照) ご指導いただいた専門家や諸機関にもお送りし、活動へのご理解やご指導を仰いで来ました。

また、これまでの活動の中で最も心を配ってきたことは、安全ということです。山仕事にはまったくの素人だった市民にとって、間伐施業をすることは、危険が伴うのは事実です。6年間の活動の中で2名が、チェーンソー使用中に負傷しております。幸い軽度の怪我で済みましたが、団体加入していた傷害保険のお世話になりました。このようなことから安全・技術担当を中心に林業プロ、地方事務所 AG による講習会を企画するなど、事故を起こさないよう、細心の注意を払いつつ、森林での活動ができるように心がけております。



写真一3 森林ボランティアリーダー研修



写真一4 会報と年会報

3 活動結果

このような経緯を経て、様々な活動を展開してきましたが、その活動内容は大きく5つのタイプにまとめられます。

- (1) 個人や共有林などの間伐施業
- (2) 明科町長峰山での森林空間(絆の森)整備事業への参画
- (3) 県産材普及活動
- (4) 環境教育活動
- (5) 行政への提言

これらの活動は、森林での間伐施業と林業に携わる方々との交流を通して、必要と思われることが段階的に発展してきたものです。これらの活動が総合的に発展していくことが、市民による森林保全活動の役割であり、自然と共生し、持続可能な暮らし方を捉えなおしていくことにつながることでありうると考えます。

それでは、以下に項目ごとの活動内容を紹介します。

- (1) 個人や共有林などの間伐施業

北山の森個人所有カラマツ林1haの間伐(1999年~2000年)、大町市大黒町共有林ヒノキ林2haの間伐(2001年~2002年)、明科町長峰山絆の森アカマツ林0.5haの間伐、明科町個人所有スギ林0.2haの間伐などを行って来ました。これらの施

業に関わる道具は、ナタ、ノコギリは自前で購入し、チェーンソーも15名が個人所有しております。その他の施業に必要な道具は会所有として国土緑化推進機構の助成金30万円で購入しました。この助成金のお陰で必要最小限の道具を揃えることができ、他から道具を借りずにできるようになりました。技術指導については、地方事務所林務課のAG、山仕事創造舎等にお世話になっております。年数を経るに従い、林業のプロも入会し、会内部で研修しつつ施業が可能になりつつあります。しかし、これらの施業活動を通しての市民の役割は、山の手入れができない地権者の手伝いをしつつ、山を守っていただくように励ましていくことです。なぜなら全く山のことを知らなかった市民でも力を合わせていけば、このようなことが可能だからです。ずくを出し、山仕事を楽しみに余暇活動をしていく感覚が、これからの時代にとって必要なことと考えます。また、実際に造材し、市場に出してみても材価の低いことに驚きました。これでは山仕事をする人もいなくなっていくことが、身を持ってわかりました。山を守っていてくれる人を絶やしてはいけません。その為に市民ができる役割はどんなことかと考えます。

(2) 明科町長峰山での森林空間(絆の森)整備事業への参画

地方事務所林務課AGの紹介により、1999年12月明科町の候補地を数箇所見て歩いた結果、長峰山に決まりました。『「天平の森」交流研修施設の活用を図りながら一帯の森林整備を進めたい』という町の意向があったこと、会にとっても安全の確保、緊急時に施設があるという安心感が得られることが大きな要因でした。翌2000年の春からまず一帯を歩いて、どんな林分が観察することから活動を始めました。今まで行ってきた針葉樹人工林の間伐施業と違い、一帯10haは様々な林分が混在しており、いわゆる里山として人間が利用してきた様相が強くと見受けられます。長峰山山頂に次いで2番目に標高の高い烏帽子山(920m)とそこから流れる水を利用して、かつては水田耕作をしていた湿地があり、長峰山における最高所の水場であります。多様な生き物にとっても生命線であると考え、『生き物の調査をしながらどんな森林整備をしていくか方策を考えていきましょう』と町に提案しました。まず地元の古老に山にまつわるかつての暮らしの様子をお聞きし(写真-5参照)、植物、樹木、地形、地質、昆虫、野鳥、動物などの調査を続けて来ました。(写真-6参照)この調査にあたっては長野県自然保護研究所の研究員、チョウの専門家を始めそれぞれの分野の専門家にお世話になり、その謝礼については町の方で予算付けしていただきました。様々な角度から里山を観察していくと、森林の様相とチョウの種数が非常に関係深いことがわかってきました。地方事務所と町が開催した育樹祭をきっかけにチョウにとっても人間にとっても良い「チョウの森づくり」が始まりました。地元の小学生、近隣の昆虫クラブ、県外の小学生の森林体験の場として、チョウという生き物を通じた新たな森づくりが展開されています。(写真-7参照)また、聞き取り調査を通じて地元住民から竹皮草履編みの講習(写真-8参照)をしていただいたり、村祭りに招待されたり、里山の歴史や文化、人情に触れる交流がなされて来ました。



写真一五 地元住民に話を聞く



写真一六 チョウの観察



写真一七 地元小学生と「チョウの森づくり」



写真一八 竹皮草履編み講習

(3) 県産材普及活動

このように活動してくる中で、まがりなりにも実際に伐木造材してみると、山の手入れが進むためには、木材が使われないとダメということが理解できるようになりました。そこで、身近に取り組める活動として地元カラマツ材で作られた環境学習家具「組み立て式机と椅子」の普及活動を始めました。この活動はすでにNPO「につぼんこどものじゃんぐる」が取り組んで来られた活動です。小学校での導入時に子供たちの組み立てを補助する活動です。この事業には、木材の活用はもちろんですが、子供たちが自らの手で組み立てることを通して、愛着を持ち、物を大事にする子供に育っていくようにという願いが込められています。身近な森林に関心を持ち、暮らし方を見直し、環境学習への発展の導入としての意義を持っております。(写真一九参照)



写真一九 組み立て補助活動

(4) 環境教育活動

机と椅子の組み立て補助活動を進める中で、もっと子供たちに森のことを伝えたいという思いが高まって来ました。県内各地で県産材の普及活動をしている「信州みどりのネットワーク」の会員と共に紙芝居を製作しました。これを持って学校での総合学習授業の支援に出かけます。時には地方事務所の AG と協働で、それぞれの立場で子供たちに森のことを伝えて行きます。(写真—10参照) また、実際に徒歩での遠足に同行し、森林を観察することもありました。



写真—10 子供の質問に答える

(5) 行政への提言

このような活動を通して全県で机と椅子の導入が進むようにと国と県に補助事業にしてくださいという提言をしました。現在「木の香る学校推進事業」として導入が進みつつあります。

4 市民参加の森づくりへの考察

さて、以上のような6年間の活動を整理してみますと、以下の要件が満たされると市民参加の森づくりが展開しやすくなるのではないかと思います。

- (1) 安全・技術の習得＝プロの指導、各種研修会参加、自主学習会開催、経験情報の共有
- (2) 活動場所の確保＝人とのつながりと信頼関係、行政の協力
- (3) 活動資金＝行政や企業からの補助金
- (4) 人的・技術的な援助＝学術・行政・地元住民

おわりに

森林での活動の成果が出るのは、年数を要すということが6年間の活動をふりかえってみて気づくことです。高齢化時代の中で、社会に向って人生を役立てたいと考えている人々は少なくはありません。ただ、何をしたらよいかかわからないという人が多いのではないかと思います。この潜在力を森林の保全に向けて活かさない手はありません。『どのようなきっかけや条件が用意されれば、国民は森林に向うことが出来るのか』現在森に関わっている人々の経験と知恵を集め、その方策を練って行くことが肝要と考えます。6年というまだまだ短い活動でのつたない報告をさせていただきました。このような機会をいただきましたことに心から感謝を申し上げます。今後も仕事を持ちながら、少しでも良い森を後世につなげていけるよう、地道に活動していきたいと思っております。